和語抄

釈子部

巻

倭論語卷第十目録

秋氏部下

園朝　禪正
良兼　慈基
增基　芋栗
宏助　慈源
顕尋　憲寛
兼意　經耀
守禪　傍助
經蓍　尋忠

尊覚　任意
忠兼　義耄
性守　祐厳
良鎮　義賢
隆壽　隆憲
公順　宗助
覚厳　公誉
俊清　隆秀
道真　良誉
教玄　棄基

湛圓　勝圓
澄俊　道悟
真盛　鉅誉
覚誉　兼覚
政玄　尋圓
隆恵　秀馨
公範　禅意
真玄　亘覚
天覚　策爰
存海　道喜

良怒　　堯然
尊賀　登修ノ下　　道弓　同上

倭論語巻第十

釈氏部下

国朝日生死をいとゞず金谷玄乃所かづき
てゝ道とゝ名をとゝりてあらそらむるあ
らん。是一大事乃要なり学ぶ者ひろく儒史
よりもとめにまよはぬ

若越遠江守平朝時三世平宗教男也玉
作撰法下諸道通達之人也号大通院
禅正円。学文乃所近ハ日蓮に有と。円季乃
うけつたゝるよ。爰乃求めみるに拙系に有

さぬ。さのみにとるべきさまなくてどのまら
うの神乃あつるさまに及がしさうみる時法
界一味にして意あらざらんなる

伊勢肥前守平盛富五男也一生不犯大藏經
二度色身三宝自然良智人ゝ

良兼曰琥珀ちうを飲すれば滋
天ちうを吸ふ先ゝまちうを飲不吸人と
あく邪曲なるゝ人はあらざるをわさまへ
て所するうはあゝ人さなりられあさちう
るる所ちう大道をを的ゆる世をさなるを

従一位関白兼嗣公二男也号一乗院
慈基曰佛者乃儒乃佛乃儒乃佛乃を
異端也と云ふ人こゝあるべきもを仏乃あるべき
儒者にあらざるべ乃ハ二なるきまをもちうゆゝ
なり。をしるの思ハうゝをもあるべき
をあらざるべ乃外あるまゝゆゝ見ゆる

関白兼平公六男也延暦寺法勢大僧正号
止観院執行生身明王秤見傳密示
稽基曰学文乃乃あるべ不思量なるとゝ
とも毎日書の書よもちひぬまへちふ

てゝらゝ祢らゝをぬりハすゆ
こさあつまゝ日十日ゝてくゝ
て。ゆゝの中乃さまゝを給ゝらゝ
ゝあつまゝてゝ一日二日ゝ
こゝゝ甲斐ゝ
をゝゝゝ
ゝらゝ

関白基忠公八男也三井寺僧正実和
院
等奥同人の姫をめさひたまの迎ゝ君と結ひ

人乃君と宮ゝ君ゝゝ
宮て君ゝ
君ゝとゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

伊勢国播守平貞長五男也六角大膳大夫
源高頼朝臣猶子江州禅光寺開山
宏助同諫言ゝ宮人
交光宗乃尼君ゝ

み毎に式法をうしなふ人へ故たゞひめのみ
紙屋を見よおるゞ佛乃漢　万代しらくうき
毎しもて仏偏あり　おやのゝ代あひをるひ
ゝさ
ゝく傳ふ半なるさがゝ　ゝしあそれ
ゝなる公なの種ゝうらさるをおこ仏代
らひなるゝ人おのをとおるゝ　ゝなゝさ和よ
ゝを出る漢言なるをゝ人ゝ乃をの事を
すゝ　おゝ人るさまゝくゝよゝわをれくきゝ人
歌乃ゝらひなるゝのなゝ　ゝ為くゝやゝしゝさ
くゝゝまくゝあるゝ代まゝひなゝあゝ

まゝさゝる

叅議従三位文章博士少納言菱系在永ゝ二
男也大僧正号仁和寺理　證院兼　影齋
慈源同人ゝ　戒佛をゝる多ゝなんゝ和をゝ男をゝ
公をゝをゝをゝをゝよゝ男をゝ　ゝ代ゝひまれ
ゝるゝ人ゝ代戒佛をゝる多ゝなんをゝおゝ人ゝるゝ人ゝ
事代ゝゝさずゝて　ゝ測のゝをゝ玉をゝゝる
ゝゝゝゝ　ゝ智恵をゝあゝ　ゝ宗乃号文をゝ
人ゝを傳ゝをゝゝゝおゝ人ゝる傳ゝゝゝゝ
ゝるゝひゝゝんゝ教ゝゝ宗乃ゝ者ゝゝ

物ゆかりとくがれいはあるかの菊しぼはあらはと
あのとゝのうちさのまゝ心まうせていひち
らしぶるしぬるのゆきもとゝのくに聖人名
みるとも恐まぬとそかるしなれ

菅原淳仲朝臣三男也横川長吏竹林房
回峯三千日稱生身不動傳密戸
顯尋曰世みぐまて大勇あるそれ法をとろ
ろく智識あるいつるゆいひ
つてうぬるまなり世みぐまて法すまあるの時
ゆるしたもを大勇猛名生あるひみぐろく

よはらあずさまろにつるもろうあるて代人類
なりゆのあをぬ和代はまもるものハ治世ろも
治世ろ附りおしまなり

右小將藤原氏紫朝臣三男也顯密通達人也
憲字曰右雲くれしき猶ハいろ孫一見のう
ちみを紫ろの稱あくそれてあさまゆに人の
うるさ猶ハ乃ゆまそ愛つとろおやまりおく
学行ハ伝ろをるいひちら人のあるとと
みる代をろうからぬるハニよるべるの佛の
四をりみるうらくぬらひをあそそれ世

智ハ人ノ男女ノ事ヲ思ヒ遠クヲ弁ヘ
奇物、財宝ノ賊宝ニ惑ヒ貧窮ヲヤシナフ
富貴ヲ願ヒ貧ヲ厭ヒ賤ノ人ノ事ヲ思
ヒ遠キ事ノ心ヲ思ハヒ時ノ名聞ヲ傷ル

横河長史權大僧都法戸憲基男也号三
光院大僧都法戸
義憲同ノ子ノ人ノ浅ラン事ヲ
思ヒ遠クヲ思ヒ遠キ事ヲ思ヒ
家業ヲ思ヒ遠クヲ思ヒ
天命ノ賦ヲ思ヒテ学ビ問フ人ハ

ヲ戒メ思ヒ遠キ事ヲ思ヒ
ヒテ世ノ難ヲ思ヒ
ヒテ学ビ
ヒ学ビ
ヒ学ビ

山徒權大僧正二位法戸憲玄男也大僧都法
戸大樂院
經耀同人無念ナル時ハ正也有念ナル時ハ邪ル
ヲ邪ハ人ノ心ヤ
ヲ思ヒ如ナリ武ル人ヲ
ヒ邪ハ面白ク学ビ人ノ

かくふく所ハむかしよりて人のこゝろ所なくさ
敵なり邪智ずさましさまたくいやなる事に知かれ
尊きのハかりうすしも天下のさたかやるの人
なるべし

權大納言藤原經長卿子也三井大僧都　顯
密兼学一生不犯不邪

仁和寺の守覺法印の弟子にかゝらせしいハ人每よ
ならハらぬもの都にハ教よむかしき事の色
所しと志にて所乃事なのもましき成り
相教るりなれいつもあの所し根本なされい

良知明めしてやさし安時所の事自在なり
此さらく弁へ志まる終とみすの智識とも云べし
一宗の事まで能ならぬ僧もハ人を恨とおもふ
ひふくめる終それハ何教も諸乃学文をハ志ける
事ぞやと所腹いふく僧の出家となりぬの佛う
はあるまひをやめ百五数よ悉燃ふく佛の宿
うこかれまじきに教道の事をすらし弁へくさ
そ知ねの道に志てくりのをあひ教まてなる
ふりまひ乃よ月見代おく所そぞ文なくあて
過なりなりくと時の證人を後生ふくおもひ

慈悲を正直も出家よりやまさるなりとぞ
うけたまわりて世代乃うやうに後生を信ぜん信ハ大
なる罪人なり地獄に落ちるものハ何に信
なりぬ人をもしり弱みをもるべし弱みをもるべ
きに信ぜざるべきなり

中納言藤原為經ゟ也年三ゟ来臣来
来之安居用之人
東大寺乃僧勝日世ゟ多を文出をひろく学む
てんちゝ仏の宮ひ中乃中ゟ吹ひゆるを
をぷゟ年ひ信ゟ智恵を知を恵信ゟ人ハ

大かゝ百乃世をハうく知をゝを如經をハ
ちゝぬ日ちなり廣学なるハいうゟ為ぞや
ひゝ乃人のゝひ屋うに為ゟ人ハ仏一代乃
説法を宗にかゝうゝを一句を明にをんゝを
すゝぞを人をを宗小乃ゝを廣学
ゝ乃ゝゟものハ智恵をうゝを知を経て
ちぬる方ハなをゝゟものなり

權中納言俊實卿ゟ也十三歳之時年十八
殊而得自然智
興福寺乃經蔵信ハ七年乃間ゟ觀ゟ為を

毎日一巻づつ毎日一巻づつ
ゆ八文の三月十八日の巻に江州竹生島に
人参りていひらかハおくとの文二年の昌信
かうまの事 法華経名称
おのく諸天集り給ひ
いく数巻ゑ〻となり
れ内中やとおもひ
忘れくるひ
まひて年来のひ

経をのうく元生おとろ書写読誦よりて
ことかうの十三百七十余人なりけれく
たき僧よ宝のあらくをえんとすれ
ともて出意情欲乃虎狼
あるへ給ひとかり
そそきけて夫社仏堂乃破壊
ら来一年八百六十三年なり
ゆ給れめてそれ感
正二位中納言藤原経後の五男也奥福寺ノ
別当

東大寺尊恵僧正曰佛をねがひてあるまじき
ことねがふハ結縁ありといふ事なれど仏乃ゆるさぬ
ましけれどおもひに落ぬれバ心ざしあてみだるゝ
ゆゑ魔のはかりごと佛心のまゝにして一向なるべし

正二位中納言藤原冬房卿三男也拜弥陀来迎之云

興福寺光覚曰法に遍執あれバ僧ハ心に魔界に入
やすくはかりがたき仏を尊て僧にまぎれぬ。されバ
魔界に与力するものハ多くして佛界に入ものハ少
し。魔仏一如の観法をおこなふものハ大方ハ魔乃
道よりしぜんなり。魔のことする僧ハ是をうやまひ

用て世にまどはせやはり魔界に入のしたるを
信男に入なれども今のものハ貪欲をつくして人是を見
ひとびといよ〳〵魔界に入ものも多し。或ハ信施を取
て一家をもぬかさず殆ど心に入なれバ
精ある事あれバとて世乃一の所事を拔ずして
信男をかゝる事なかるべし

関白忠教公三男也号龍花院

任意曰破戒なれども慈悲ありてさん人らくのうひ
或ハ信をかうおろそかに戒を持ても慈悲あるべき人はら
信男をゆるすべし。慈悲乃心は佛の正直心はら佛

なりまゝとゝさゆへて生類をあはれをろかくを
みるにたえずして夜を深閑をそなまさるまゝ海ゝ
欲ゝ入ゝ者ゝ喜ゝ傷の者をあはれし給ふ
ものゝ中にもかのつゝ給ふ

九条関白経教ゝ八男也二ゝ歳ゝ住持廿二歳ゝ時宣
中拝普賢人也

延暦寺忠尚ゝ伝の名ゝ賢ゝ世智ゝ弁ゝ
乃ち物なり伝の名ゝ賢ゝ世智ゝ賢ゝ
の恥なり世恥ゝ人ゝ対ハまゝなり

関白政忠ゝ男也大僧正景ゝ毘沙門堂

義堯曰智恵ゝ人ゝ乃能ゝ海ゝ入ゝ海ゝ入ゝ勢
の出世をもゝと能ハ物系浄ゝ物ゝ物ゝ
ゝなり人ゝ物ゝ物ゝ自生ハゝ
なり仏ゝ心なりゝ海ゝ輪回なり

慈眼院関白政基ゝ二男東大寺法勢大僧正
又号二宝院ト

大光寺性守曰仏ゝ
仏ゝ
也又ゝ
悪ゝ

物をこうらひ
祐厳曰。天下の一言の法つきて又一言の法なし。仏乃又一
言より地獄の法ばかりなり。諸人
俗生死にはまる。善の人は好ていとめば悪の人は好へとも
なしてこの善なり悪なり善悪まで〳〵の人〳〵
なりこの人は主人なり男女の下人なり。ぜんの人
ぜんの人乃ちなり。ぜんの人なり。ぜんの人なり。ぜんの人
りこの主人なりて。男女共に礼やむとれ
なし

一条関白経嗣公男也。桑南朝生家父不和ゝ

号随心院
良鎮僧正曰。世の人乃ぬ事乃ゝ多し。出家は俗家
の業をいとひ俗人は俗を捨て出家と
いるむ。我乃ようなる人いうるを。他人の業にう
こからんや。他人乃ゝ乃ゝ色をゝ夢おは他人のおもひに
おもふ乃ゝこゝ事なり。

祐厳之弟号曇珠院僧正。世典一部一生讀誦
也。文珠乃ゝ来ゝ毎度也。
義賢曰。人乃ゝ為ゝ乃ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ
なりこゝ乃ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ善ゝ悪ゝ

御すゝめがくる所より始まれ又めかハ我仏のち
からなりとて落涙し給ひぬる其時観音菩薩
現じ給ひて異類人の為に我らが命をすくひ給ふ所ハ海の
室に入くだんから身を隠しあらハれ給ひし堂
ひとし兼て夢を見るに果して其の長八寸
ばかりの観音の金色なる尊像の御かたちぞ
見えけるが仏壇の上におさまりける縁あ
さらくなる事ハけるが如し義明氏ふかく信じ
其後毎夜夢中につげ有て命を救ひ
かみ是を宝前に祈りて給ひけるせの

錦手に御つかひとなりし所義明ハ常にわが経堂を
建立せなりて何かやありがたく念じ居たる

足利左兵衛督持氏大納言満詮の三男也

号三宝院　六僧正　准三宮

嵯峨隆基の日記に時大なる雨なりしの夕さ中に漢家
本朝の書とて何に付き勤るを事色なきハ人の
佛の内証もちゐぬぞおろかなる道なり済法寺も
真のおしへなる事をさとしてその祖師の旗を
くつがへし天下に人のひとしく此ゑ外の道とつるぞ
て給らんハ宗しき物の中の名第一なり

従二位隆政卿五男也号横河大僧正又号
法
隆憲同智識ハ智識ハ
法乃義者ハ世ノ
ヲ
従二位権大納言藤原隆遠卿二男也号光
明院僧正諸道通達之人也
云順同人ハ
ヲ
ヲ
ヲ

逆人ハ世ノ
ヲ
ヲ
九条金頂寺別當禅観二男也号人号謙
律師
醍醐寺宗助僧正同此法四至五逆ヲ
僧ノ大罪ヲ
ヲ諸
の人ハ
とせし時白雲山の僧
てくりぬ

こゝろ〻〻ゆゑ人のおこなひそしひあすぞやとぞ
さまゝ〻くゑ伝をしぞ鷲尾乃伝と毋に書く石
山寺へまうてらるに鷲尾の伝を毋物語るを
世よりのハ悪さ式を続うりの世よりも悪し
人をへつらくいるむと学てさてを伝ともの衣
うりを恥なして新乃ものぬ事らをいひよりあつさ
海乃人〻ぬがくいひめ〻ぬ式宇て是ま海さ
もつる大悪人又あらしさおもひ出る山の伝し鷲
尾の伝を毋年法久しくしらう海うく伝りしうく
をゝ〻ぬくせをのにいひうてんしゝへ是新乃

ら悪人なりと是くぞれより張いらう人ぬ式くく
ひの出家乃を浅乃世を多かるうんそこうそれ出
家の出家もまうふ世りハまを通るう物ゑら
中御門中納言藤原宗重の弟也号ス理性院ト
覚厳曰ふ人と敬るくいひさ式ますかるう
をうを信性ふくさ人ハの貴信うもなを続こうす
なり貴人ハ天の伝ふをうを和めて世の事ハあう
をゝ是と妻新ふを時へ天式めくめる新なり世の
さうひとを続ぬ伝ふ式ぞ伝のをもあまやう
ならんとは是のを

園中納言基隆卿四男也　延暦寺僧都法一嵗之
時化得自然智人也
公誉曰人貪ハ世のもとゐ富貴なれ
ども業なくして下賤なるもの
ゆゑしあて貴人なのあるさまもあ
まめとす此ハ能弁人ハ智徳あらんものハ貪ることを
うやまひまつらず　ゆゑなものをうらんにたり
ゆゑなしとて貴人なるあさまし
内山僧正古大弁覚信卿二男也一生貪交不
俳貴人也俗号地蔵菩薩

後清法師曰ク家ハ一乃至あり善友の人なりとゝ人
ゝ世ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
の高家ゝ高家ゝ高家ゝ高家ゝ高家ゝ高家ゝ高家ゝ高家ゝ
かろんじ家位を高ぶり出家ハ大きなる大徳あ
つまうてたくして人の物をかくす式三家乃至百
ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ
従一位大納言藤原資綱卿四男也贈大僧正号
佛地院大蔵両度一生不犯
奥福寺別當隆秀僧正乃いとくゝ仏ゝ法ゝ
人のうんとゝつぶさんとゝ

うつさ物かりハすゝ物ゝ道ゝよりとゝ人ゝ和ゝう半とゝ
てをいまゝざつぶさゝゝゝぬ処ゝ道ゝゝ人ゝはかゝらんゝゝゝゝと
ゝゝゝゝゝ世ゝの経ゝあゝゝゝ道ゝぬ道ゝゝ職ゝゝゝゝ物
ゝゝゝゝゝ

道真曰長老西堂の号ハ変位よハあゝゝゝ。仏家ハ
てゝ乃稱号ゝゝゝゝ。法堂にゝゝゝゝてゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ男になゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

近衆園日政家云二男一条院大僧正法警

人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

語なる世のありさ様なり

園白房副云二男大僧正准三宮聖護院新
熊野検校

良基言曰人の云ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

延暦寺慈基僧正曰。文をよむと云ハまことの
人の道の心を知る事也。賢人なれば古文を読ならでも身のまま
まことの道をしらんものゝ經をよみて見る道ハ色欲
なりし聖人なりと云ども文をおよまず
ふるきものを見て我のこゝろをたゞさぬものハ名聞
欲とも學ハ人の好む所なり文いろにあらハるゝ
あるハ此さかいをまなびをもの学ぶ人もあるものハよくしらする
みのかゞみとし給ふ

傳有爲

興福寺教信僧正曰。さとりある人ハ唯おのれ

學をせし聞のさまざまがあらしがさらんとするも
り言葉ハし、おのれ道をしらずして明々歴
然たる物がたりを昔の人の手跡とて一句を合
せあし文の人の心を然なりとおもふハおろかなる
かくれ

關白太政大臣忠平公二男也號二一條院一法務
別當

仁和寺法印寛基曰。此法在家出家の僧俗をとはん、
人をなづけ道の遺恨なき人を歎くし、かの人を
あるじとたのむ言葉のあやまりあるべしといふ

そうしきはいうるをきへ眼乃玉まんゑとまび皆
みて後ハ人ゑ為べきさまうりゆ内の大恩を考へき
んゆ者の最部ゑみうりとうゑ

正二位大納言藤原基副ヲ三男也号ニ仁和切
徳院ト

湛園法師曰ゆ内ゆ云まゆき中多中ゑ
ゆ一ゑ男女乃うゑゆ一ゑ利欲乃物ゑ中ゑ
為ゆ。ゆ己ゑ引為の吾恩ゆ丸ゑ奥ゑ味のゆ
ゆ一ゆ六ゑ人のうゑさゆくハかうをあかうゑ
云べうゑ。ゆ七ゑ諸膳員ハ教生乃業うをあ

て悪ゑなゆ。ゆ八ゑ仏教乃内ゆ儒人
みうゑゆ九ゑ物ゆ法の物ゆ十ゑ法ゆうゑハ
ありうゑ。ゆ十一ゑ物ゑあうゑひゆくゆゆ十二ゑ
吾ゑの世中ハ一定ゆひゆ人をかうゑすゆ
ゆのうゑゆハ世間食うゑをみゆくあゆ
志うゑをあひあうゑ

松殿関白師家ゑ孫也後報恩寺ゑ老道世
膳号法ゆ曰。出家為らんものハ俗性をゑうゑ
ゆうゑのなうゆ。新子ハ種ゆとゑ俗性ゆうゑ
なゆうゑものハうゑ俗うゑゆうゑゆうゑ

ぱいやーきっとさ、ぜんまなる僧ぷぷれすとみそへて寺つの所僧いのしくなり彩のなり弘法乃墓なくの信仰さのこうこぬいまさく者別なまたを時乃僧よくらべてらべうこた

正二位大納言藤原基継二男大僧都号吉井仁和寺律師澄俊ハ一生不犯ゆくおこうけるぶ或時おをつぶ女の手ちとりの代とり移ひく此ゆ乎ゆうゆまたくうまこう者のまとうかけくまてらまくうとこうりぷ言曾大師長吉より僧くうん来世よりゆうこうさたへなるこぷ行者をみてハかなりーぷうまとうふうと

あさるんとぷのこまうこと是くへ夢さとゆぬこれハ右乃ゆりとゆあくゆりてありゆまうゆあくぬうゆ夢を

てくうこうこれとも物乎みくうハまんへこと者

別ゆりて大師乃業紀うをーあうゆ面うなを

ぷどこうあまくあ物うをくうをうゆて大師の墓もよ

こうくうすぷ紀ぷうてみゆくのうこぷうこむり千巻

の伝法と書て言野みよ山えくうくなり一ぷよ戒彩

こうくしこゆよハぷくのこと九ぷなるうもあゆ

うあそ

東大寺尋忠曰人毎ハ法ゆよ仏号を唱くぷ

朝に仏号を唱へ一生のあいだ雖怠なり。是たり
後のなごりまるーなるこゝ人をも仏号をもとのこゝか
ねとしも。なお朝仏号をとく唱へ人をもつく涙のん
あたなりうこゝ。ねうこゝ
三井寺笑法師曰。世のの仏ゝ刹と共ぬものハ
金くに仏を行なり。世のあらゆる悪行ハてこゝ
そも。自他ともに明なるもの。百巻をみるこゝ
ぬ。をとおろかなるーなる人を。仏乃ちもろこゝ
をべうこゝ
三井寺僧云曰。人の仏説のあらく状も聞るるく
いげ世の法みくを修行あきハ。衣食の二ゝのこゝ
縛ハこゝもいうもあるものすり。衣食をとゝむ
ろ。ゝりハかりて。飢乃あるものなりぞろうあるの
いを。を東んとて。命をを。ふなり
同白経教云四男也三井大僧正
任意曰。仏者乃。一ゝおゝのべるるぞ。多かこゝ人
あをうけ。あひうゝ仏法を仏するる。三世のき云
ん。ぬくいうゝ。ゝ羅御法を仏をんべうこゝ。をやうぎ
ゝの。ゝ乃命し。紀念して。甚をを。ゝ。ぬべ
諸天善神ハ。常なこゝ事をおゝ人。ゝ。ゝ。ゝ

成するまでハ、かるの法則ハそのつくり成就を
関白経教公ノ八男也二尊院ノ住持
名陪円光観よ嫁するもののいふやうく成仏をとげて説をよ
は七の是なり。これその国の人をに貪着して二に悪病を
うくるなり。三よちりつく人みな地獄に落ぬゆゑの
人世多時ハ大雪ふりぬゆゑ大火あり。ゆゑなん諸天
善神その国にあまくあるべし。ゆゑは万民安楽なり
そのよ人の心正直して国家みだりなり天下の何ぞ
うんものよてしかあるべし
関白政基公ノ三男也号ス三井ノ長吏実満院ト明見

勉政人也
真盛曰、念仏三昧に入ぬるまでハ極楽をたのみたくて
三世の諸仏も日本にあひ来りたまふの弥陀をつ
ねり唱名の念よ来りたまひぬ。音声の弥陀ハ同体
となりたまふ。ひとのおもひをのまくなりたまふれめて
されば念仏をとうとき世の中にみちる人ハよそながらの
山よ入ずとも心をしづめてかへるこころ
うく一切衆生をみちびきて。来世念仏の利益
衆のたのみよりて信ずる心おこらん時一念乃内
よ入て往生の行者とならず一念りみだりなん

ちく義礼仏の行者あるべし念仏を

勢州礼氏上部左兵衛尉光時男十四文時年日

吾望真子権現夢ノ一生不犯念仏三昧行者也

号智吾院法師或三昧上人西教寺開山

起誓曰生々世々にあらかさき物ハ孫他の若芽ぞ乱

かくさきものハおのれ義ともるくうてともれく念仏の

三昧に入ぬ人ぞ乱くく来迎のあらさ海ありかさし

ともいとなくらかみ人の義あらんよりしてぞ世

のさきのしれぬうさ苦海をきちうんそちさま

しきれ人紅一代程をとゝぞ百金の立業を義

物ゆ人なりとも念仏のちくをうきすゝ多

吹紅すしいくあまくて海路とものうんといとんう

ちうぞ仏ハ者ぞ乱くぞ世を猫系ハ西うハ念仏

の外ゆしとおうしいく一乱をよぶ代名をうる仏ら

人ハ人吾人ハ吾かうものうぞ人ハかうあ

吾の猫ともいとうハ一生何の西の仏ら風人ハを

きて一生ゆ世すゆ世ゆうれうハぞ悪人の中の

西人ハ人ゆ仏の義ハ乱ハ夢をうようる

しとおうハとも海義利益の乱ら多ゆ世ハ海

ちうくもの海くよ仏義をもの

ものなり

三河国岩津城主安城和泉守源信光が男右京
亮親忠が五男也知恩院上人松平次郎信忠叔父也
覚誉曰人の世にすぐれし時ハその様みじかし富貴なるか
時ハ我の奢強されて己天理より富貴貧窮を
天なりよりひとくむらしも人のいふめ道ハそのむなる
ありしまへは善なりが貧窮ゆえて福をとりあハぬ人へと
動をとりて火焼をがほとしぷ吉をとて禍をと救へハ
患難をとて天火焼にんとおもまがほゆし分焼さ
まうらをして後々焼さものなんすもりなり

近衛関白太政大臣尚通公二男大僧正号一条院
興福寺別当

兼覚法印曰君乃ありさまにおもしま凡時陰の賢き
世ハ民いつくしみ恩恵あつくして陰その表ときこゆ世へ民其
なり一山の宗領広学なる時ハ宗侶僧義正しく偏執
なくまのこころ賢乃書ひろし宗領おろかにあらずならへ
一宗の学正かやられてとゝもこ宗侶にみな偏執多し
てたつも非学なかぐ人の善悪をひろく人にも詰恩
広博よあつされてものくふ乃をひのみも驕慢ハまし
とかりも実なるかれへかかる恐人を猶悲をつく人の

くらゐあらんものとハ世の人ありとも定て此説法
のをろかなるなとハ思まし給ふ事よ
按政大臣藤原兼忠公四男弘明寺法中
浄土寺政玄僧正十三歳乃時仏母の為に一字三
礼の弥陀経を手写ひたまふ此の中そのの三昧花の
まへよりおこりたり一切の世の制ならわに仏母尼
ひいびくらを作り来つる法ひ人うまつきの仏の神牙
子成おく唯今改伝し作る也ひとりのあまりと
りおひまいらをとうんとて事ハ作とやされるもて
政玄いとけなきさをよ長絶うきう功法うりくまい

つ〻ものひとやとうらもしるひやうやなきいひくうさ
けをしくまいをうれしとなりをもうと出家のをよ
くして父の仏をうさうに母のうけさにて為ま
うてびえのひとのうりてぶうくまをしてきひ
をそびく傳教大師花うくにそうきひてをまを
をうう さをとハをうしく為ろとなうぶよハ衣の
為をんしぶうもるを知識ゆくみとめをたうさうう
をて沙門さうとうとなりをとうと出家のこと先
しうとぶ成十八歳とおもてつをもをうくの成をの
をを為めをうんりのハ忍辱甲冑して菩提をりしむを

みたてし。毎日中雲にまいりあひたてまつる者のあ
りとて。念仏一万遍。光明真言一万遍つとめ給に
わしらの多生の世うれしく法他仏といひく者絶
ずしてやすらかなり。大師法後多式僧正
の勅奉し給ひしとかなり。山王毎月の時に新田の
つくしてあつて

従一位関白左大臣房平公四男延暦寺執行
檀越法勢号浄土寺僧正

尊円親王若大納言子孫をとろへあるを勅ずして用ら
ず。ただかなり出家を若知識の身ゆゑ

邪見なりといへども。是をあひて抜おそべき事
なり。若死の後を思ひ。ひとりのこゝろ
ばかりおろかなり。ものの行ひのもとくらべ
ばかりにすぐれたり。張さ人の手浄若知識の身
なりもまさしくかのおろかなる中のハ
人をあはれまんとゝ必大納言の家量ハあるものなり。是
者の人の及ばざる如天理なり若知識の身をも
ゆるなるあるべきあるべしとつのさきのさう
き法の及ばざる智恵あり。是若人よそうし知うそ
ぞく人のるれ如天理なり。あ式のさうひとをもそ

なく智恵のこゝろなく天の命をしる処をしらずして
愚なる人をも知識とおもひしかど

従一位関白尚経公二男号大乗院僧正一生之内
両度大蔵経一覧

隆恵曰今時乃貴人はそれらを好みそしおとしとむ
慮もちてつまびらかにおもひしより世にあるさ何ら悉を知る
ところ衣法波羅蜜をやめて乃それ業めぐり観じき
世のおくいやしきに我のすめる人として我のむね
こゝろなすめぐる乃すみる先非を悔は百年のうち
ろれ日乃あ人ものとのて孫に及く後にあそら人の

至剛なるよる人べきにてとりがたきなりからやうの中にて
よもあるべし後人是を勘弁すべし

鷲尾黄門正三位藤原隆康卿二男也号勧修
寺西林院一智徳兼人也貴賤雑会記撰者

秀馨曰念仏申て仏となる事はうたがひなししてしま
つとともに人をすゝむる事あるは文の心
ひたるとはましてかのすはずてもそこらよの人あるれ
とも世の末になるとは仏神の感應もあらじそて
かのわうせいの諸法ひとあさましかるべし此法
の人なりがたきをまよひ親子あらそひてかいよ

命をうけ給ふ富貴の身ぐしなりて出家いとは
の世をそむくにもとまじきそなれ誠心の修行
つとめいやましてゆく末をねがはんやとて
おもひ切りて後世の出家にぐしは法を責て後
人よりもとくひとりこんをうけらのるさとの
加ぐ

伊勢守平貞経二男浄花院上人請家兼学
云範円記ハ しとの世ハ重人ハ郷人なまけて立ちの
と郷ふかなり公あるんのぐくのさうな
みさをとくふぐて法ゆく世をまつぐ人を

郷よりなやぐ安ぐんおぐしひ大臣公約すぐ人
の人なりと云

三條内大臣公保公猪子実亡角政頼朝臣六男延
暦寺僧正執行一切経両度一筆
穆意大僧正円武士の幾ハ膳ハ家一七森平の間
をおさめる事ハ家をそ龍ハ約安して
常住の戒約ハ事ハ出家の上ハ
もくぐの上なるかくしぐ人のうさいハひ安して
吾うさい嬉ぐ人ハ法ハ龍ぐ安して
ぐいくるのしぐの悪物ハ物安して家物ハ

るよ人のありさまハ能く家なるといふハみぐすぢ紅
粉の縁ハつちあして繽紛しあるまハあるさし人の
文ハあらわ婁して文ハ玉をしよう前のうみなく
まぐれなくをハ天地のうちにいろあらん

関白高通公四男東大寺准后大僧正改義俊文徳人也

真玄曰出家と云ハ世の中の貪なるの能のなり富
貴ハ愚癡の処なりと出家と云ハ知恵とふそその
人ハ百姓と高人ハあるほと鶴人なるがよし百姓
高人ハ知恵糸ねもハ物を洗浄しよ代るうしめ
衆をいふとして男を失ふ夢ひなりといふうるる人
のまゑふ凡出家の出家めさあるし士乃士の心あるえ
とんまやしといふ半かる能比丘ずあらしいふ出家の出家
よくあハ必破戒なあ士の士めるあハいふまうりも臆病
なるものなり是あとの字なれか出家ハ方うそくしてそ
の一そふよくあるるあ知識なりいふとも又男氣ななく
と常なげなる世うる士のともやいまん

佐々貴管領源高頼朝臣四男也十九歳之時厭領不足出家住叡山号正覚院文道僧而念佛三昧人也江州来迎寺開山也

毫覚僧正曰人皆物とおがむべしと云ふ是面を不
見ふかあら事也此ことばをすぐるなな
ほ根性しらるる人をつまとも是又根性の
あくざるをいるし我の人乃好わる方成これハ中こと及
なれぬまこと乃をおぼし是又そ行をすぐるる
がくいとあるる事あるべ方をいやなる
氣根のくこハ天性生つきの如よをさけてね事
かなるべ[illegible]ハ[illegible]のをの道をみる
まうしうしうハ物いひをるひの大ろうてこいいと、
ものをあるれなか

筒井伊予守定朝臣二男延暦寺稚大僧都
兼叡應寺住持
天覚曰古今書そ我の所ふあ、さらぬ如ら人を
あまとしるあさうぬるあ人的ものあさうれざれ
ぞ所とのう昔ハ慢家のあらなり
業慶曰ものの人二六時中絶の非をうぐ和うん
ものと一时なりとも是非をかうへの
又曰言葉多きものハ人の奴とれる。言葉ふくく
すさしも乃ハ人此多人ものもうしこ云
ずくるまものハ人ものもうしこ云
ずくるまものハ人ものもうしこ云

云ふ所の婦人云ふ所の
海内人乃不見ずして仏神
を祈り願ひ我の物ぐひ助しを
まつなりとうかがひの事
を聞て百思を破まる所よりなり
又やまと国の仏法よりれいとなるべし人のこと
つまなり色仏法を和国のたしづきしたるね
ものつつ半なり古今相伝乃ことを引かれも
半ばかりなるべし

又曰ふ所の人のことうはそとこつる事
むつかしきつよるべし人まこうをあるべ
のまたるべ人なること事多しあるべのまこと
こうのいとまやたまこうあるこうあく
たくさんなる事あるし
道義曰ふことあるべ人のをよ入をうひ人れこう
なるりんとおもよ心をいそのまこう祈なし唯物信
外よりつたよそむくまとおもよるし
物うるこすする事まるまおやもの心をの夫婦
先事をのべるこ云ふ吾祈るべ祈とこた

よりて万の事是よりおこるなり。此仁をたもつ事
ものハ万乃事にまさるものぞ

後柏原院第四御子　仁和寺覚上乗院　母ハ尚
侍継子　中納言入道永継か女也

良恕法親王曰。千代ふべく人の縁となり。文武乃
武田信玄と云ける人なりし。是こそ武のあるじ。漢家にて
智仁勇乃三つをそなへたる人ハ、君一乃孝の
みなもとのいくさの道ハ云ふかいざる。さる人ハ武家
の知一代の鏡と定まるとも、乱妨一あるハ是を出家
とそんや。又それをまなもの大孝乃一代無双也ぞと

忠孝をみだり。仁をてらし義をまもるものなり。おや
を進退し臣を使ふとも良ねといひ。しかし武のや
からを云ねと云ハ武家意地を備へり悪敷意の働
きべからひ。修するものハ、おやに敵をくやのまもと
それかくすまの根をもして花実のなりぐるなり。と
おもひがまし。たいく志かんなりとなりけり
しかやうの事をぶぎんとす。是ハ後世の士卵ゆるり
入るもの也

又曰。今世の公卿そ不志気なるものを多し。按へ
公家の知りなるべきをもざるい、地下の中なるをつくる

さるのよこくまてくがまえよきこさぐの事多しじやか
在の哥人もも乃書おし物ハ世の家にはくそさ
まぬく後人此志ましたも卿べされバ下さ海のりや
あれのく同利よおよべ御事一乃恥なりお代在を
下さ海よさくきそ二の恥なりおも職の在をすま
あくきて三のものうす世の武士しは言葉つるいお
んださんゆして世よ名れる家のおうも官位を公武
士りハ不礼なり光太きに在ららふ所あして四の恥なる
其言葉なりハらどく教あらぬ在うりハ要しべし恥
なり此外多きなり

陽光院第三宮号行内御は姪母ハ准三后藤原晴秀云女
興然法親王曰人ハ名乃大すろ恥ハ家職よううとえと申一とえ
又曰人ハ毎よおひお附ざるかる成物うり穀多おり第一ミ
をえらぬ人の善悪の物かくりみて察しうるこれいひすそ
云事ぞ第二経すをハいふうくあしくいひ悪すさんそ
きおらぬ事まてそわそへ云事第三和のまより恥の
らへるそとひそくハすべ第四出家ハ武家の上式
家ハ出家云家のら人て武家あらしめての事又俗

名文字ハ倭国のたとへ。其名文字と和歌一ちす
しるしと。吠ふうり学を秘義とする此の歌名と
きいるを知て。国のたとへと先す。中六句神国ハみ
ちの道を中一とまもりて。節をものをとハ乃乃るなり猿
ぐ。鼻乃垂るる一乃猿と笑へ。うがゆし。是亦神明の
おしくをやぶり。霊祇をみだりがましくうれ
ひ。貴七人のうち乃海ていをいとばしてとる
勝手のうつきをとり中下をとる。船うり代を
国うり売なるさハどうべうれそうひとるまじき
とうひとなり

後陽成院第八皇子義尚法院御門跡

秋民部卜終

七月尾

倭論語巻第十終

清家秘本之中秘也門外不出
縱雖爲當家庶流不可書寫之
龍律國之寶鏡也

傳聞いにしへ漢潦乃蒼海に三稜の金
光ありて浮沼あり免れたる者陽
うの、に成て三稜乃金光おのれ〳〵三光
宝神聖となりてこれを拾ひこれ
に神國あり第一人皇をこれをもつて一刹
利乃系統相續一一て未嘗移草相流も又
たのれ事爾浮ふ乃うち豈有ぬ光玉沼ふく
滅乎さて神皇日滅を根ちて京度文那

さう殺義を世ふこと京ゑ宮式神名帳に神代乃
けぶらう世このたゑて神祇あり神武天皇
らうなゑ稚院に及ひ清ふしを三うこ
ゑて源くうて人てみすゑれし孤た
義久重中清原良業世書き叡慮に綴へ
しくハ上皇なのめれらゑこひ給りて良業
に作く今らう殺上天ゑら庶人ゑ殺ちて
称をなゑん長ゑ三てしくむ一ゑ

四

ゑて義て久しきをみはけ免ゑう寛ゑ
重乃今ゑ殺ゑて為ゑれし
乃乃ゑ花ゑよ武き林に実のんゑいく
世ゑ流ゑし清し代君ゑ園乃君ゑいゑ

洛東山隠士羽林長啃子誌

寛文九己酉 総国陽月良辰日

四條烏丸小路西ノ入町
板元 尾張屋勘兵衛

二条鼓屋町西ノ入町
山本長兵衛

新町錦小路下ル町
海老屋孫兵衛

弘西